

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 1日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530854

研究課題名（和文） 学校における「道徳」と「特別活動」の連携・協働体制に関する実証的研究

研究課題名（英文） Empirical research about the cooperation and the cooperation system of "morality" and "extracurricular activities" in a school

研究代表者

越智 康詞（OCHI YASUSHI）

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：80242105

研究成果の概要（和文）：現在、規範意識の低下など、道徳性の教育が問題になっている。本研究では、トップダウン方式で推進する道徳教育の手法の問題点を実証的に明らかにし、それらが学校を単に目的合理的な組織体として捉える枠組の狭さがあることを示した。さらに本研究では、子どもの道徳性を育成するには、子どもがそこで自由に育つ条件や環境の整備が不可欠で、学校を教育空間として捉え、特別活動と協働した実践が有効であることを示した。

研究成果の概要（英文）：Now, the state of moral education has been a problem. In this research, it clarified positively about the present condition and the problem of moral education. We also examined the factor by which moral education lapses into malfunction. In this research, the importance of the environment where a child grows up freely was pointed out. Moreover, we proposed about the validity of the practice which collaborated with extracurricular activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：特別活動、道徳教育、連携

1. 研究開始当初の背景

平成22年度より一部実施された「新学習指導要領」では、各学校における「道徳」の指導計画・内容の取り扱いについて、「学校における全教育活動との関連の下に、児童、学校及び地域の実態を考慮して」目標を設定することが要請されている。また、「特別活動」についても、各教科等の指導との関連を図るとともに、「家庭や地域の人々との連携、社会教育施設等の活用などを工夫すること」

が各学校に求められている。

「道徳」「特別活動」の二領域ともに、「教科等」の「全教育活動との関連」や「家庭や地域の人々との連携」の重要性が謳われているにも関わらず、各学校の実践場面では、領域としての「道徳」及び「特別活動」が、「道徳の時間」や、運動会、合唱祭などの学校行事、学級会活動、クラブ活動等に矮小化されてしまっているのが実情である。また、学校における道徳教育の実践は、依然として「読

み物資料」を利用した道徳的心情の感得に焦点化される傾向があり、コールバーグの理論に基づく「モラルジレンマ」を用いた実践(荒木紀幸他)や「価値の明確化」(諸富祥彦、尾高正浩他)、「ケア理論に基づく道徳授業」(林 泰成)など、さまざまな実践的な提言が行われてはいるものの、道徳的・倫理的判断を求められる場面でのクリティカル・シンキングや判断力の育成に焦点づけられた実践はほとんど見られない。「特別活動」については事態はさらに深刻である。学校における「特別活動」は、運動会や合唱祭に典型的に見られるように、〈イベント化〉〈ショー化〉の傾向があり、そこでは〈ガンバリ〉や〈一生懸命〉といった精神主義的な言説が支配的になりがちである。

新学習指導要領の告示とあいまって、「道徳」と「特別活動」の学校経営上の協働の重要性に関する提言が増加しているのも事実である。この問題については、山口満が、「学校カリキュラムのデザイン再考」という視点から道徳教育と特別活動のあり方について論じ、さらに特別活動の実践的課題を道徳教育との関連を中心にして論じているほか、『道徳と特別活動』において増尾敏彦が「特別活動と各教科、総合的な学習の時間との有機的な関連を図った道徳教育の工夫」について提言を行っている。さらに「特集 新しい特別活動の風」においてもさまざまな角度からの提言と実践例が紹介されている。

こうした先行研究が近年増加しているものの、各学校における「道徳」や「特別活動」の取組と、カリキュラム経営や学校経営上の問題とを組み合わせた観点からの実態調査はこれまで行われてきておらず、本研究が企図している実態調査の学術的意義は大きい。

研究代表者(越智康詞)は、これまで「総合的な学習の時間」が小・中学校に導入されたことによる学校文化・教師文化への影響について実態調査を行い、「総合学習」が学級経営にポジティブな効果をもたらした反面、教師の専門的基礎づけを欠いた教育課程上の領域の導入がいかに学校のカリキュラム経営や学校経営、ひいては組織体としての学校における同僚性や協働を困難なものにしてきたかを明らかにした。本研究は、こうした研究の延長線上に位置づくものである。また、研究代表者と研究分担者(山口恒夫、山口美和)は、教師の教育実践へのリフレクション研究を、教育実習生を対象として行なうとともに、プロセスレコードを用いたリフレクションの分析を通して、教師の内面的な意図と表面に現れた教育的作用(行為)との関連を言語行為論の枠組みにおいて研究してきた。本研究は、これまでのリフレクション研究を、単なる教師・児童生徒間の相互行為

(コミュニケーション)に留まらず、学級づくり、カリキュラム経営、学校経営にまで広げ、教師間の同僚性や教師・保護者間の協働にまで踏み込んで、学校における「合意形成」のあり方を「道徳」「特別活動」の二領域を研究対象として探究するものである。

さらに、研究分担者(山口恒夫)は、この十年余り医師卒後研修における指導医の教育・ワークショップや医学教育研究に携り、専門職像の歴史的展開、省察的实践家としての医師や教師の教育や研修カリキュラムのあり方について研究を行ってきた。その中で、医師や看護師をはじめとする医療者同士の組織的連携と合意形成がいかに重要かについて認識を深め、この点での学校教育の領域での後進性に着目するに至った。

2. 研究の目的

小学校・中学校の学習指導要領において「道徳」教育は学校教育全体の活動を通して実現されることが明記されている。この中には「特別活動」を通して道徳教育が実践されることも含まれている。特別活動は、子どもたちが共同生活を通して自己を確認するよい機会であり、道徳教育の根幹にかかわる重要な活動である。他方で道徳や人格形成的な理念は学校活動そのものの組織化の支柱となる。しかしながら、これらの活動は相互に連絡なく異なるロジックのもと断片的に実施され、その理論的意義の検討や具体的な方法やその成果の検証はほとんどなされてきていない。「道徳」教育が表面的な実践にとどまり、子ども達の学校生活が生徒指導=管理対象となるのは、こうした縦割り/断片化(全体的視点や連携の欠如)に大きな要因がある。

以上のように道徳教育と特別活動の現状とその連携のあり方について研究するのが本研究のひとつの課題である。しかし同時に、本研究は、「縦割り/断片化」の弊害に注目していることからわかるように、道徳教育と特別活動をその中に位置づけてきた「学校教育」の理論枠組それ自体を検討に付すものであり、新たな理論構築を行うその準備作業となることを、その狙いとしている。そして、こうした学校教育の包括的な、領域横断的な研究を推進する上で、道徳教育と特別活動は特権的な位置にある。それというのも、道徳教育を広い意味で捉えれば、学校教育の根幹それ自体にかかわる理念だからであり、他方で、特別活動といえ、子どもがそこで学び・経験する学校のフォーマルな課程全体にかかわる領域であるからである。しかも、この理念の視点と領域の視点は学校教育において相互に交差している。さらにいえば、「道徳教育」や「特別活動」といえば、これまで学校教育にとってある意味で躓きの石

であった。一方でその内容・方法・守備範囲を巡る議論がイデオロギー的な対立に巻き込まれ過剰に熱しやすい領域だからであり、他方でその範囲・内容を明確に定義するのは困難で、その実現方法についても、通常の枠組み（目的／手段図式）に収まりきらない、つかみ所のない領域だからである。戦後、我が国の人格性・道徳性を巡る教育は、「道徳の時間」を特設しつつも、学校教育活動全体を通して行うという全面主義的な体制のもと、曖昧かつ無難に行われてきた。こうして学校活動は明確な理念的省察を経ることなく慣習的に実践されてきたが、その結果、道徳を形だけ教える「道徳教育の儀礼化」や「道徳的に粉飾された管理活動」が広がることになったのである。このことは確かに一方で、現場にある程度の自由度（試行錯誤の余地）を残すものとして機能した。しかし、学校・教師の権威の自明性が崩壊し、また教育の説明責任が求められる現在、こうした曖昧な活動・方法をそのまま維持することはもはや困難である。

なるほどこうした省察・再構築は容易ではない。もしもわれわれが道徳教育の現状を直視し、その省察・改革に取り組もうとすれば、カリキュラム領域の境界はもちろん、教育の目的と手段、内容と方法、フォーマルとインフォーマルといった既存の区別それ自体が溶解し、学校とは何か、教師（役割）とは何か、といった根本的な事象にまでその問い直しは及ぶことになるだろうからである。しかし、このことをネガティブに考える必要はない。むしろこれは学校とは何か、公教育の役割とは何かをその根底から捉え直すチャンスなのである。しかも実を言うと、こうした問い直しはカリキュラム論や教師論の領域で既に開始されている。佐藤学は「教師の働きかけと子どもの学習経験の総体、および、その評価までも含む包括的な」カリキュラムの観点から「教への計画」モデルに依拠した我が国のカリキュラムへの問い直しを行い、ドナルド・ショーンは、複雑な実践の前提・帰結を省察しつつ創造的に実践を展開する「実践的省察者」の観点から、教師の技術者モデルに再考を迫っている。本研究は、まさにこうした一連の「省察」的研究に接続し、この方向性をさらに押し進めようとするものである。

3. 研究の方法

以上のような現状認識及び理論的射程を含みながら、本研究では、「道徳」「特別活動」の二領域について、これを相互に交差させながら、理論的、実証的に問い直す作業を行った。理論研究としては、学校を（目的合理的な）組織の観点から捉える研究の限界や問題点を明らかにし、学校を環境の中で存続する

システム、さらにはそれ自体が自律し特有のロジックを持つ教育空間として捉える枠組みについて検討を行った。また、このような観点から既存の研究や調査を整理し直した。また、実証研究としては、「道徳」と「特別活動」の各学校における取り組みの現状と問題点を明らかにするために、文献調査、聞き取り調査、実態調査を実施した。調査は、①学校で道徳教育を受ける子どもの視点からみた現状の調査（学生調査）、②教員の視点から、学校での道徳教育や特別活動に関する実態についての調査を実施し分析した。道徳教育が形骸化しやすい背景、特別活動の実践の、〈イベント化〉〈ショー化〉をもたらす要因、連携・協働を阻害する学校内・学校外での要因の析出も焦点を当てる。他方で、各教員が、直面する課題に対しどのように対処しているのか、とりわけ現場でどのような工夫や先進的な取り組みが行われているのかについても慎重に検討した。ここで「道徳」と「特別活動」にかかわる現場の混乱や課題を取り上げるからといって、それは学校現場を批判するために行われるのではない。むしろ現場を困難に追い込む、社会の環境や制度、とりわけ私たちの教育観・学校観それ自体の問題点を浮き彫りにし、その改善を目指すことが狙いである。

4. 研究成果

本研究のひとつの特徴は、道徳教育における受け手の立場から見た現実、教え手の立場から見た現実の双方の視点をクロスさせながら、道徳教育の現場でどのような問題が発生しているのかを観察した点にある。こうした視点のズレや相互作用の観察から、子どもの生活空間としての学校は、とりわけ消費・サービス社会における影響を受け変動し、その結果フォーマルな学校の教育体制についても、権威や自明な前提の崩壊などの問題を抱えていることが明らかになった。これは学校環境や子ども文化の複雑化としても捉えられるが、こうした複雑化により、学校（道徳教育）が想定する伝達モデルの単純さ・不十分さが、子どもと教師の双方にとって「見え見え」になってきていること、その結果としてとりわけ道徳指導において、既存の枠組みに適合させようとする方法が混乱・機能不全を増幅させていることなどが明らかになった。

もちろん現場の教師達は、こうした困難な状況に直面して、ただ手を拱いているわけではない。現場では、こうした問題に対処すべくさまざまな工夫が行われ、新しい実践も編み出されてきている。とりわけ、子どもの現実に即した、子どもの意欲を引き出すような実践技法の開発に力を注いできている。とはいえ、それらは子ども受けをするという表面

的な手法の改善・工夫にとどまり、理念的なレベルでの省察が弱いという課題がある一方で、教師たちの時間的・精神的ゆとり、相互の支え合いがあつてはじめて可能になるものである。教師に余裕がなくなるとますます理念的省察は省略され、現場がうまく回ることで自体が自己目的化する。ところが、今回の調査から、教師は多忙化するだけでなく、教師を取り巻く監視のまなごしの強化により、現場に応答した実践を支える精神的ゆとりや自律性、さらには教員相互の支え合いそれ自体が破壊されつつあることも明らかになった。性急な結果を求める監視のまなごしが実践の不備を生み、実践の不備が教師不信を生み、教師不信が監視のまなごしを強化する、といった悪循環が生まれつつあるのである。道徳教育に関連して露呈しつつある現場の困難は、とりわけ均質化した子どもに均質化した教育を伝達することを中心に組み立てられてきた学校教育のあり方それ自体を根底から見直す必要を訴えている。しかしながら、現実の政治・教育世界において「道徳教育」の現状批判（改革要求）に乗じて生じていることは、教育の事実や現場の実情に合わせて既存の枠組みを問い直すのとは逆のベクトル、つまり道徳の教科化の議論に象徴される計画＝実行モデルの強化であり、＜現場・事実軽視＞のベクトルである。計画＝実行モデルのもとでの道徳教育の推進は、道徳を要素化・断片化することで、これを人格の全体性や社会過程から切り離す一方、学校活動全般に潜在する「隠れたカリキュラム」を否認することになる。だが、それだけではない。形式的な枠組みと実践の一致を無理に求めることは、刻々変化する複雑な状況に応答した実践や経験的な事実¹に依拠した実践の省察を困難にし、結果として、日々の実践が遂行される現場に過剰な負荷と歪みをもたらさずには於かないだろう。子ども、社会、学校はそれぞれきわめて複雑である。理念や計画にそぐわない現実を無視する狭い枠組みにとどまれば、＜善なる意図による教育の破壊＞といった悲劇的な帰結をもたらしかねない。これが本報告から得られた仮説（警鐘）である。

とはいえ、教育を目的合理的に制御できないこと（技術欠如）は、決して嘆くべきことではない。そこには終わりなき探究・生成の可能性が広大に広がっているということでもある。そしてこの広大な潜在的な領域・可能性を味方につけるには、現場のさまざまな経験に学びながら、その省察・改善を繰り返していくことが必要である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①金子真由子・畠仲征一郎・越智康詞，現場から見た道徳教育・特別活動の課題と展望－トップダウン型カリキュラムから自己創出的カリキュラムへ－，信州大学教育学部研究論集第6号，2013.7（掲載確定），査読無

②越智康詞，「社会規範の混迷と現代社会－生きた規範の再生に向けて－」『児童心理』No.943，2012.1，pp.26-32，査読無

〔学会発表〕（計1件）

①越智康詞，現代社会における道徳メディアの乱舞と道徳的成熟の困難－閑暇の場としての学校に「道徳」教育の可能性を探る－，第70回日本教育学会，2011年8月26日，千葉大学

〔図書〕（計1件）

①加野芳正，越智康詞編（他12名），新しい時代の教育社会学，ミネルヴァ書房，2012，pp.101-117

6. 研究組織

(1) 研究代表者

越智 康詞 (OCHI YASUSHI)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：80242105

(2) 研究分担者

山口 恒夫 (YAMAGUCHI TSUNEO)
信州大学・教育学部・名誉教授
研究者番号：60115384

山口 美和 (YAMAGUCHI MIWA)
上田女子短期大学・講師
研究者番号：80564856

高柳 充利 (TAKAYANAGI MITSUTOSHI)
信州大学・教育学部・助教
研究者番号：60575877

(4) 研究協力者

金子 真由子 (KANEKO MAYUKO)
秋草学園短期大学・講師
研究者番号：30591193

畠仲 征一郎 (HATANAKA SEIICHIROU)
信州大学・教育学研究科
研究者番号：なし